

‘ΣΥΜΒΟΛΟΝ’, ‘ΣΗΜΕΙΟΝ’, ‘ΝΟΤΑ’

—ボエティウスによる『命題論』(16a3-8)のラテン訳—

周 藤 多 紀

1 はじめに：問題の所在

ボエティウスは概してギリシア語の原文に忠実な訳者であるが、アリストテレスの『命題論』冒頭に関しては、ギリシア語の原文とボエティウスによるラテン訳の間に明白な相違が認められる。

[アリストテレスのテキスト] (Minio-Paluello 校訂版¹⁾ in OCT.)

Ἔστι μὲν οὖν τὰ ἐν τῇ φωνῇ τῶν ἐν τῇ ψυχῇ παθημάτων σύμβολα, καὶ τὰ γραφόμενα τῶν ἐν τῇ φωνῇ. καὶ ὥσπερ οὐδὲ γράμματα πᾶσι τὰ αὐτά, οὐδὲ φωναὶ αἱ αὐταί. ὧν μέντοι ταῦτα σημεῖα πρώτων, ταῦτα πᾶσι παθήματα τῆς ψυχῆς, καὶ ὧν ταῦτα ὁμοιώματα πράγματα ἤδη ταῦτά.

[ボエティウスのラテン訳] (Minio-Paluello 校訂版 in AL II-1)

Sunt ergo ea quae sunt in voce earum quae sunt in anima passionum **notae**, et ea quae scribuntur eorum quae sunt in voce. Et quemadmodum nec litterae omnibus eadem, sic nec eadem voces; quorum autem hae primorum **notae**, eadem omnibus passiones animae sunt, et quorum hae similitudines, res etiam eadem.

σύμβολον と *σημεῖον* という二つのギリシア語の語彙に、ボエティウスは *nota* という同一のラテン語の語彙を当てている²⁾。こうしたボエティウスの訳

は「誤訳」なのだろうか³⁾ (疑問 1)。

ギリシア語の原文に忠実な訳を旨とするポエティウスが⁴⁾単純な翻訳ミスを犯したとは考えにくく、こうした訳を適切と見なす理由をポエティウスは持っていたように思われる。ポエティウスは、なぜここでアリストテレスの原文を文字通り訳さなかったのだろうか (疑問 2)。

本論は、ポエティウスのラテン訳とアリストテレスの原文を比較対照する際に湧き上ってくるこれらの疑問についての考察を試みる⁵⁾。

2 アリストテレスの『命題論』における *σύμβολον* と *σημείον*

ポエティウス訳の是非を判断するには、まず、アリストテレスの原文における *σύμβολον* と *σημείον* の含意を正しく把握する必要がある⁶⁾。

σύμβολον の重要な含意の一つに規約性がある。アリストテレスは『命題論』第二章 (16a26-28) で「規約によって (*κατὰ συνθήκην*) と言ったのは、いかなる名前も自然的に名前である訳ではなく、*σύμβολον* になった時に名前になるからである。」と述べ、*σύμβολον* が規約によって成立することを示唆している。*σύμβολον* の基本的な意味は携帯者の身分証明等に用いられた「割り符」(tally) である。割り符は、一方が他方の片割れと合致することを利用した規約的なしるしである。名前は、規約を踏まえる者にその正しい意味や対応する事物を同定させるという点で割り符に類似している⁷⁾。

さらに *σύμβολον* は *σύμβολον* と *σύμβολον* で示されるものとの間の平行性を含意する。アリストテレスは『命題論』第十四章 (24b1-4) で次のように言う。

したがって、もし思いなしにおける事態が実際にこのようであり、声に出して言われる肯定命題と否定命題が魂の内にあるものの *σύμβολον* なら、同じものについての普遍的な否定命題が肯定命題と反対対立することは明らかである。

この文章の直前で、アリストテレスは〈いかなる善も善ではない〉という普遍的な否定の思いなしは〈あらゆる善は善である〉という普遍的な肯定の思いなしと反対対立すると述べている。思いなしがそのような状態にあり、且つ、声に出して言われる肯定・否定命題は魂の中の思いなしの *σύμβολον* なら、声に出して言われる全称肯定命題と全称否定命題とが反対対立するのは明らかであるとアリストテレスは主張する。こうした主張は、*σύμβολον* と *σύμβολον* が示す魂の内の思いなしとが平行関係にあることを示唆する。

σύμβολον が持つ「平行性」は、名前が *σύμβολον* と呼ばれ、算石に喩えられている『詭弁論駁論』第一章 (165a6-10) の記述の内にも観取される。

事物そのものを持ち出して議論することは不可能であり、我々は、事物の代わりに名前を *σύμβολον* として用いるのであるから、名前に関して生じることが事物に関しても生じると見なす。それは、計算する人にとって算石に関して生じることと同様である。

一つの事物の代わりに一つの算石が、二つの事物の代わりに二つの算石が、異なる種類の事物に異なる色の算石が用いられて計算が遂行されるように、名前は名前が指す事物の代わりに用いられ、異なる種類の事物には異なる名前が当てられる。名前が *σύμβολον* として用いられるということは、名前と事物との間にこうした平行関係が人為的に設定されることである。

先に確認されたように、*σύμβολον* が「しるし」に加えて、しるしの成立における「規約性」と、しるしとしるしが示すものとの間の「平行性」を含意するのに対して、*σημειον* は単なる「しるし」以上の含意を持つのだろうか。*σημειον* が推論の前提命題に相当するものと規定され、乳が出ることは当の女性が妊娠していることの *σημειον* であると言われている『分析論前書』第二卷第二十七章 (70a7-16) での *σημειον* の用法等から *σημειον* は「自然的記号」であると主張する論者もいるが⁸⁾、以下に説明するような理由で、『命題論』の問題箇所 *σημειον* を「自然的記号」と解するのは不自然である。

アリストテレスは『命題論』全体で *σημείον* という名詞を五回, *σημαντικός* という形容詞を八回, *σημαίνειν* 及び *σημαίνεω* から彼が造語した *προσημαίνειν* という動詞を多数使用しているが, 16a17 の *σημαίνειν*, 16b10 の *σημείον*, 16a20 の *σημαντικός* は, 明らかに, 規約的なしるしである名詞(名前)や動詞を説明する際に用いられている⁹⁾。こうした *σημείον*, *σημαίνειν*, *σημαντικός* に囲まれ, どのような「しるし」「意味表示機能」であるかを限定する修飾語を欠く 16a6 の *σημείον* が「自然的記号」を意味するとは考えにくい¹⁰⁾。『命題論』では, 「規約に従った」という言葉で修飾されるような (“*σημαντικὴ κατὰ συνθήκην*” 16a19) 「しるし一般」「しるし一般の意味表示機能」を指すものとして, *σημείον*, *σημαίνειν*, *σημαντικός* が用いられていると理解すべきである¹¹⁾。

σημείον が「しるし一般」という意味であるなら, 規約性と平行性を持つしるしである *σύμβολον* は *σημείον* の一種である。*σύμβολον* が *σημείον* の一種ならば, 「声に出して言われるものが魂の受動様態の *σύμβολον* である」(16a3-4) 時, 必然的に「声に出して言われるものは魂の受動様態の *σημείον* である」(16a6 のパラフレーズ¹²⁾)。したがって, *σημείον* と *σύμβολον* という二つの言葉が一つの言葉で置き換えられたとしても, 置き換えられた言葉がより限定されたしるしである *σύμβολον* のニュアンスを保持するのであれば, テキスト全体を通した意味内容は本質的に変化しない。

3 ポエティウス訳の問題(1): なぜ *symbolum*, *signum* が選ばれなかったのか。

続いてポエティウス訳の検討に入る。*σύμβολον* と *σημείον* に対応すると考えられるラテン語の語彙 *symbolum* (*symbolus*)¹³⁾ と *signum* がなぜ採用されなかったのかという点に関して¹⁴⁾, ジョン・マギーはいくつかの仮説を提示している。まずマギーの仮説を手がかりにしながら, その理由を再考する。

3.1 *symbolum*

マギーは *symbolum* (-us) の使用例が古典期に希少であることを指摘して,

この語が「ポエティウスにとっては少しばかり外国語風であった」から避けられたのかもしれないと言う¹⁵⁾。しかし、プラウトウスの喜劇¹⁶⁾やアウグスティヌスの説教¹⁷⁾でも用いられている *symbolum* (-us) が、当時避けられなければならないほど外国語の響きを帯びていたとは考えられない。

マギーは更に、*symbolum* がラテン教父著作の伝統で「使徒信条」というテクニカルな意味を持つために¹⁸⁾、そのような意味とは無縁の『命題論』の訳語には用いられなかったのかもしれないと述べている¹⁹⁾。

私は、ポエティウスが念頭においていた『命題論』の文脈にそぐわない *symbolum* の用法は、マギーが想定しているそれよりも広く捉えられるべきだと考える。アリストテレス以降、ギリシア語の *σύμβολον* は、しばしば神秘主義の文脈で²⁰⁾、(1) 特定の集団に属する人々にのみ真の意味が理解される隠語²¹⁾ や (2) 神的なものとの合一を可能にする神秘的な力を持つ言葉や印²²⁾ を指した。

こうした *σύμβολον* の用法はラテン語の *symbolum* に引き継がれている。例えばフィルミクス・マテルヌスは、異教徒達が用いていた魔術的な言葉や印を *symbolum* と呼んで非難している²³⁾。また、キプリアヌスは信仰告白を含むキリスト教の洗礼の一連の儀礼を *symbolum* と呼んでいるが²⁴⁾、この *symbolum* は特定のグループの中でだけ通用し、それによって人間が神との特別な結びつきを確保するという点において、神秘主義の文脈での *σύμβολον* と同様の諸要素 (1, 2) が認められる。

言うまでもないが、『命題論』の *σύμβολον* は 1, 2 のような要素とは無縁のものである。*symbolum* が「使徒信条」をはじめとした 1, 2 のような要素を持つ特殊なしるしや言葉を指すのに頻繁に使われていたという事実は、ポエティウスが『命題論』の *σύμβολον* に *symbolum* を当てなかったことを正当化しうる。*symbolum* と訳すことは、アリストテレスの論じようとしている「しるし」の性格を誤解させる可能性を孕んでいたからである。

3.2 signum

『命題論』冒頭の *σημειον* の訳語に signum が選択されなかった理由を考える上で、マギーは *σημειον* が signum と訳されているボエティウスの『分析論前書』のラテン訳に注目している²⁵⁾。同書第二卷第二十七章のラテン訳²⁶⁾で、signum は、端的に言って、推論（シロギスムス）の結論を引き出す理由となる事態ないしはその事態を述べた命題であると定義されている。推論は中項の位置によって第一格から第三格の三つの型に分類され、第一格の推論のみが必然性を有する。「乳が出るゆえにこの女は妊娠している。」という第一格の推論の例をとると、〈この女の乳が出ること〉は〈この女は妊娠していること〉の signum（徴証、しるし）である。この場合、signum である〈この女の乳が出ること〉は、signum が示す〈この女が妊娠していること〉を結論として引き出す推論の小前提になる²⁷⁾。一般化すると「PはQの signum である。」（P, Q = 命題）と言われる時、Pと潜在的な前提命題Xとが大・小前提となって、結論Qが引き出されるという構造をとる。無論、PがQの signum として捉えられるほとんどの場合において、このような三段階の推論が頭の中で遂行されているわけではない。しかし signum と呼ばれるものは、論理構造化された場合、第一格～三格のいずれかの推論の前提命題に相当するという特質を持っており、『分析論前書』（ラテン訳）ではその特質をもって signum が定義されているのである。

ボエティウスが signum と呼ぶのは、翻訳でも注解でも多くの場合、このように推論を構成可能なものとして捉えられた事態ないしはその事態を記述した命題である。以下はそのいくつかの例である。

- (a) このことの signum（証）は次の通りである。「ヤギシカ」は何かを意味表示するが、もし「存在する」ないしは「存在しない」を端的に、あるいは時間に即して加えられることがなければ、真も偽も意味表示しない²⁸⁾。
- (b) テオプラストスは、これがアリストテレスの著作であることの同じ signum（証）を与えている²⁹⁾。

(c) もし医術が病人の顔のうちに彼は死ぬほかないという致命的な signum (徴証) を認めたとき、我々には医術に関する無知ゆえにそのことを知らないとしても、その無知ゆえに、彼が死ぬだろうということは生じないこともありうることであって偶然的な本性を持つと判断すべきではない³⁰⁾。

(a) は問題箇所と同じく『命題論』の第一章(ラテン訳)だが、σημείονが signum と訳出されている。ここで signum と呼ばれている〈ヤギシカは単独では何かを意味表示はするが、真偽を意味表示しないこと〉は、〈名詞や動詞は単独では真偽を意味表示しないこと〉を推量可能にする事態として捉えられている。

(b) は『注解』で『命題論』の真作性を議論している場面で、signum と呼ばれているのは〈テオプラストスが肯定・否定に関する『命題論』での記述に言及し、更に『命題論』では論じられていない事柄を詳しく説明していること〉である。この事実は〈彼の師であるアリストテレス自身が『命題論』を書いたこと〉を推量可能にする事態として捉えられている。

(c) は先の『分析論前書』(ラテン訳)の箇所同様医術の文脈にあって、signum と呼ばれる顔に現れた症状は、その症状を持つ人の死を必然的に予測させるものとして捉えられている。

論理学著作と見なされる『命題論』の冒頭で signum を用いれば、signum と呼ばれている「声に出して言われるもの」を『分析論前書』(ラテン訳)で規定されているような意味での signum、つまり推論の前提命題に相当するものと誤解させる恐れがある。ポエティウスはこうした誤解を避けるために signum を用いなかったのかもしれない。「声に出して言われるもの」は命題だけでなく、単独で発声された名詞や動詞も含んでおり、それが signum として示す「魂の受動様態」を結論として引き出すような推論を構成する必要も、命題である必要もない³¹⁾。

4 ポエティウス訳の問題(2)：なぜ nota が選ばれたか。

4.1 キケロの先例

このようにポエティウスには *symbolum*, *signum* を避けた方がよいと考える理由があったとして、*nota* を選ぶ積極的な理由はなかったのだろうか。

この点について、マギーは、キケロの『トピカ』の一節とそれについてのポエティウスの注解に注目している³²⁾。

[キケロ『トピカ』VII [35]] というのも、言葉は事物のしるし *nota* であるからである。したがってアリストテレスは、ラテン語で *nota* というものを *σύμβολον* と呼んでいる。

[ポエティウス『キケロの「トピカ」注解』1111b] *nota* とは何であれ事物を表示するものである。従って、すべての名前は、それが述語づけられる事物を知られるようにする (*facere rem notam*) がゆえに *nota* であって、この *nota* をアリストテレスは *σύμβολον* と名づけていた。

キケロが *σύμβολον* を *nota* と置き換えていることは、注解を書く程にその著作を重視していたポエティウスに少なからぬ影響を与えたであろう³³⁾。

4.2 *nota* と規約性

しかしポエティウスは、キケロがそう訳しているからではなく、キケロの訳を適切なものだと判断したからこそ採用したのでだろう。実際ポエティウスは、あらゆるギリシア語の語彙についてキケロの訳を踏襲しているわけではない³⁴⁾。

nota はその語源を「知る」という意味の動詞 *noscere* に持つ。『キケロの「トピカ」注解』でのポエティウスによる説明の中でも、名詞 *nota* は動詞 *noscere* の完了分詞である *notus*, -a, -um と関連づけられている。したがって *nota* は、その基本的な意味において、知性の働きによって (x の) 「しるし」として成立するようなしるし、知性によって理解される可知的な印象 (典型的

には「文字」を指す。したがって、鳥や犬のような非理性的動物が仲間に危険や餌のありかを伝える鳴き声は nota とは呼べない。

さらに、nota は、多くの場面で、ある種の規約的記号（例えば文字、コインの刻印、ワインの銘柄や等級を表すために樽につけられた印など³⁵⁾）を指すのに用いられている。ポエティウス自身の著作の内に、コインの刻印としての nota の用例はないが、刻印 nota を持つコインと言葉（名詞・動詞）との類似性について、ポエティウスは興味深い洞察を残している。

ちょうどコインは「コイン」と呼ばれるためには、単に或る形が刻み込まれた銅ということでは十分でなく、或るものの価値でなければならないように、動詞と名詞は単なる音声ではなく、思惟を意味表示するために設定されたものである。「ガラルス」のように何も意味表示しない音声について、文法家はその音声の形を見て「名詞 (nomen)」であると主張するが、哲学〔者〕は、その音声が魂の中に抱かれた或る概念を意味表示するように、しかも或る事物を意味表示することを可能にするような仕方で意味表示するように設定されない限り、その音声を名詞であるとは考えなかった。というのも、名詞は或る事物の名前 (nomen) でなければならないからである。もし或る音声は何物も意味表示しないとすれば、それはいかなる物の名前でもない。いかなる物の名前でもないならば、それは名詞であると言われるべきではない。したがって、この種の音声、つまり意味表示するような音声は、単に「音声」と呼ばれるだけではなく、「動詞」とか「名詞」と呼ばれるのである。それはちょうど、コインが「銅」と呼ばれるだけではなく、コインと他の銅を区別するそれに固有の名称である「コイン」と呼ばれるのと同様である。したがって、「音声の内にあるもの云々」というアリストテレスの文章で指示されているのは、音声であるだけではなく、音声でありながら、或る属性と設定された意味表示のために刻み込まれた或る何らかの仕方の形をもつ音声に他ならない³⁶⁾。

ポエティウスは、名詞や動詞とコインの類似性を次のように見てとっている。(i) 単なる銅や銀の塊がコインとして通用しないように、単なる音声の塊(例えば「アー」という呻き声)は名詞や動詞として通用しない。(ii) コインには或る模様 (figura) が刻み込まれており、名詞や動詞は或る音声の形 (figura) をとっている。しかし、或る模様を刻み込まれた金属の塊が全てコインではないように、或る形をとる音声が全て名詞や動詞である訳ではない。例えば、語尾が *lus* である単語はラテン語では名詞に限られるが、何も意味表示しない *garalus* という音声は哲学的観点からは名詞ではない。(iii) 一定の価値を持つように設定された (*positus*) ものがコインであり、一定の意味を伝えるように設定されたものが名詞と動詞である。コインは一定の価値を伝えるために、取り決められた或る模様を刻み込まれており、名詞と動詞は一定の意味を伝えるために、取り決めに従った或る音声の形をとって発声される。

ポエティウスは、価値や意味の「設定 (*positio*)」が「規約に依る」と明言してはいないが、「設定に依る (*positione*)」と「規約に依る (*ad placitum*)」とを換言しており³⁷⁾、「設定」の中に「規約性」を見ているのは明らかである。したがってポエティウスは、コインも、名詞も動詞も規約によって成立すると主張しているのである³⁸⁾。実際、宇治の平等院鳳凰堂が刻まれた銅の塊は、日本国政府によって十円の価値があるものと定められ、日本国民がその取り決め同意している限りにおいて、十円のコインとして流通する。コインが規約によって成立するならば、コインの刻印 *nota* も規約によって成立する。

nota が何らかの規約的なしるしを指すのに多用されていたことは、*σύμβολον* の訳語としての *nota* の選択を支持するものと言えよう。

4.3 *nota* と類似性

しかし、*nota* を選ぶにあたって重要なのは「規約性」という含意(だけ)だったのだろうか。次のテキストは、ポエティウスが *nota* と「類似」概念との連想を重視していたことを示唆する。

「単独の名詞（名前）と動詞は複合と分割を欠いた思惟に似ている」（[2] 16a13-15）というアリストテレスの言葉は既にアリストテレスが述べたことである「声に出して言われるものは魂の受動様態の nota である」（[1] 16a3-4）ことを指している。なぜなら、もし声に出して言われるものが魂の受動様態の nota であるなら、ちょうど文字に書かれるものが声に出して言われるものの類似を自身の内を生み出すように、声に出して言われるものは思惟の類似を自身の内に生み出すからである³⁹⁾。

ここでポエティウスは、〈声に出して言われる言葉が魂の受動様態である思惟の nota ならば、声に出して言われる言葉は思惟の類似を持ち〉、また〈文字に書かれる言葉が声に出して言われる言葉の nota ならば⁴⁰⁾、文字に書かれる言葉は声に出して言われる言葉の類似を持つ〉と主張している。この主張を nota という概念に関して一般化すれば、〈A が B の nota ならば、A は B の類似を持つ〉ことになる。

実際よく考えてみると、nota と呼ばれるものは、しるしづけるものとのある種の類似性を持つようなしるしである。文字 nota は文字を書く手との動きとの類似を、コインの刻印 nota は模様を刻みこむ型との類似を、ワインの銘柄を表すために樽につけられた印 nota は焼きごての模様との類似を、足などの跡 nota は足や靴の形との類似を持つ。

このテキストで語られている「類似」は具体的にどのようなものだろうか。手短かに言ってこのテキストで、ポエティウスは、アリストテレスのテキスト [2] 16a13-15 と [1] 16a3-4 は連続的に解釈されるべきであると主張している⁴¹⁾。別の言い方をすれば、[2] での主張は [1] で既に提起されていると読んでいい。アリストテレスの [2] での主張は、簡単に言って、思考と言語が機能上類似しているというものであり、ポエティウスも『注解』で基本的にもそのような理解を示している⁴²⁾。さらにポエティウスは一步踏み込んで、思考と言語の機能上の類似性の基礎は、思考にあるとの理解を示している。なぜなら、複合も複合に伴う真理値も最初に思考の内形成され、続いて音声言語で表現

されるからである⁴³⁾。

ポエティウスは、思考と言語が機能上類似しているという主張が既に [1] でなされていると考えているわけだが、[1] (を含む箇所) についてポエティウスが同様の主張を読み取って解説していると考えられるのが、有名な「三種の名詞・動詞」説である。

16a3-9の説明の中で提出されている「三種の名詞・動詞」説に従えば、思考と話し言葉、書き言葉はいずれも名詞と動詞の区別 (という機能上の類似性) を有している⁴⁴⁾。ポエティウスは思考と言語の機能上の類似性の基礎は思考にあるとの理解を示しているのだから、話し言葉における名詞・動詞の区別の基礎は、思考における名詞・動詞の区別にあるはずである。

ところでポエティウスは、思考は万人において同一であり、したがって自然的なものであると理解している⁴⁵⁾。従って、思考の内に認められる名詞と動詞の区別も万人に同一である自然的なものと言わなければならない。

このことは、哲学的には、我々が日々用いている言語が完全に規約的なものではないことを示唆する⁴⁶⁾。自然言語の文法の中で最も基本的と言える名詞と動詞の区別は規約的なものではなく、我々の心の働きに基づいた自然的なものであるとポエティウスは考えているのである。

こうしたある種の「普遍文法論」とも言えるポエティウスの「名詞・動詞」理解は、彼の範疇を巡る考察においても確認される。ポエティウスは、音声は思考を表示する限りにおいて名詞と動詞の二つに区分され、事物を表示する限りにおいて十の範疇に区分されると述べている⁴⁷⁾。これは、名詞と動詞の区別の基盤が思考の内にあるからに他ならないと考えられる。またポエティウスは「十の範疇は動詞か名詞という性質なしには表現されえない⁴⁸⁾」と言う。範疇という論理的な、万人に通用するはずの分類が名詞と動詞の区別なしに表現不可能だとすれば、名詞と動詞の区別は全ての言語に見出されるものであるはずである。

5 結語：考察のまとめ

1. アリストテレスの『命題論』の文脈において、*σύμβολον* は「規約性」と「平行性」という二つの重要な含意を持つ⁴⁹⁾。*σύμβολον* は *σημείον* の一種であり、これら二つの語彙を *σύμβολον* の含意を満たす同一の語彙で翻訳することは正当化されうる。

2. *σύμβολον* と *σημείον* に対応するように見える *symbolum* と *signum* は、『命題論』の文脈にそぐわないテクニカルな意味をその有力な用法として持っていた。*symbolum* は、神秘主義の伝統では、秘密の、宗教的なしるし・言葉を指し、*signum* は、アリストテレスの『分析論前書』（また、同様の内容を述べたアリストテレスの『弁論術』⁵⁰⁾）の伝統では、推論を構成しうるものとして捉えられた事態やその事態を記述した命題を指した⁵¹⁾。

3. *σύμβολον* を *nota* と訳すのはキケロの『トピカ』に先例がある。

4. *nota* は *σύμβολον* の持つ二つの重要な含意を満たしうる語彙である。*nota* は「規約的記号」を指すのに多用され、しるしとしるしづけるものとの間の「類似（平行）性」を含意する。したがって、ポエティウスの訳は、アリストテレスのテキストの意味をかなり正確に伝えている。

5. ポエティウスは、言葉と思考の間の「類似性」を、名詞と動詞に分類されるような二つ以上のものからなる「複合性」「統語論的構造」の内に見てとっている。こうした「複合性」「統語論的構造」の基にあるのは、万人に共通の思考の機能である。

6. したがって、ポエティウスは（アリストテレス解釈として）次のような言語観を持っていたと考えられる。人間は、同じ事柄や同じ思考を、異なる規約に従って異なる音声で表現することはあるが、実質的に名詞と動詞の区別を欠く音声で表現することはできない。なぜなら、名詞と動詞の区別は、人間の思考構造に基づく自然的なものだからである。*nota* は、言語がこうした自然性と規約性を兼ね備えた存在であることを表現可能にする語彙であったが故に選ばれたと考えられる。

7. このように、ポエティウスの nota の選択は、基本的に、アリストテレスの意図を当時のラテン語で伝えようとした結果として理解できる。しばしば指摘されてきたように、ポエティウスの論理学はストア派や新プラトン主義の影響と無縁とは言えまい⁵²⁾。しかし、過去になされたストア派や新プラトン主義の影響の指摘の多くは、十分な根拠を持たない主張であるように見受けられる⁵³⁾。ポエティウスが nota を選択するにあたってストア派や新プラトン主義がどの程度積極的な影響を及ぼしたのかという点についての精確な考察は、今後の研究の課題としなければならない。

注

- 1) この部分に関しては、様々な異読が存在する。Magee 1989, chapter 1 は、Minio-Paluello が言及していない写本にもあたりながら、Minio-Paluello の読みが採用されるべきことを詳細に検証している。
- 2) 『命題論』を通して *σύμβολον* は一貫して nota と訳されている。*σημείον* は、この箇所=16a6 及び 16b7, 16b10 では nota と、16a16, 16b22 では signum と訳されている。
- 3) ポエティウスの訳が意味論の歴史を変えた重大な誤訳との主張をしたものとして Kretzmann 1967, 1974 が有名。
- 4) *In Isag.*², 135, 5-13. 頁・行数は CSEL 48 (ed. S. Brandt) による。
- 5) アリストテレスの『命題論』のこの箇所に関しては多くの先行研究が存在するが、ポエティウスの翻訳に関しては Magee 1989 がほぼ唯一の先行研究である。本論、注では、適宜、紙面の許す限りでこれらの先行研究に言及する。
- 6) 研究者達の見解は以下のように分かれている。(A) 両者は同意語である。(B) *σημείον* は「自然的記号」「客観的記号」、*σύμβολον* は「人工的・規約的記号」「主観的記号」という対照的な意味を持つ。(C) そのような対照的な意味の相違はないが、違いは存在する。(A) をとるのが、Bonitz, Steinthal, Oehler。(B) をとるのが、Waitz, Aubenque (ただし後者は該当箇所に関してはその解釈を否定)；Kretzmann, Pépin。(C) をとるのが Brandt, Weidemann, De Rijk, Manetti。各論者の関係文献については、Kretzmann 1974, 19, n. 8 と Weidemann 2002 に詳しい。
- 7) Whitaker 1996, 10.
- 8) 例えば Aubenque 1962, 109。同様の解釈をとる Kretzmann はテキストの典拠を示していない。
- 9) Irwin 1982, n. 15 などの指摘がある。Kretzmann 1974, 19, n. 10 もこの事実を 16b10

と 16b22 に関しては承認している。

- 10) Kretzmann 1974, 7 はここでの意味は特別な, 狭義のものだと主張するが, そのような解釈をとるのは困難である。
- 11) Weidemann 1982, 245 らがそのような理解を示している。
- 12) この箇所を逐語的に訳すと「これらのものは, 第一のものの *σημεῖον* である」。「これらのもの」はその直前で提出されている「声に出して言われるもの」と「文字に書かれるもの」を指し, 「第一のものは「魂の受動様態」を指すと理解する。異なる解釈(「第一のもの」を結合・分割を欠く単純な思惟ととる Magee 1989, 48 など)も提出されているが, ポエティウスも採用しているこの解釈が 16a6 の自然な読み方であろう。
- 13) Magee も引用している Müri 1931, 8, n. 4 によれば, プリニウスの『自然誌』(XXXIII 1 [4] 10-11) が, 中性形の使用が認められる最初の作品である。
- 14) メルベケのギョームは *signum, symbolum* を採用している (AL II-2, 41)。
- 15) Magee 1989, 55-56。
- 16) 例えば Plautus, *Pseudolus* I, i, 53-56。
- 17) 例えば Augustinus, *Sermo* 212 (PL 38, 1058)。
- 18) 「使徒信条」の呼称としての *symbolum* の成立の歴史に関しては, Kelly 1972, 52-61 を参照。
- 19) Magee 1989, 55-56。
- 20) Müri 1931, Beilage III を参照。
- 21) 例えばピュタゴラス派の人々にとって「豆を食べるな」という言葉は, 食事制限ではなく, 貞潔の命令を意味した。DL VIII, 34 = Aristoteles, Fr. 195 (Rose³); Gellius, *Noct. attic.* IV, 9。
- 22) 代表的な用例として Iamblichus, *De mysteriis* VI, 6。
- 23) Firmicus Maternus, *De errore profanarum religionum*, ch. 18。
- 24) Cyprianus, *Epistula* LXIX。
- 25) Magee 1989, 57-58。
- 26) *Analytica Priora Translatio Boethii, recensio Florentiana* (II, ch. 27, 69b6-70a24) in AL III-1, 137-138。
- 27) 形成される推論は次の通り。(大前提) 全ての乳が出る女は妊娠している。=潜在的な前提命題。(小前提) この女の乳が出る。(結論) この女は妊娠している。
- 28) *Peri hermeneias* a Boethio translatus (ch. 3, 16b 22-23) in AL II-1, 7。
- 29) *In PH²*, 12, 7-9。以下『第二注解』の頁・行数は Teubner 版 (ed. C. Meiser) による。
- 30) *In PH²*, 193, 10-15。Cf. 紅潮や血管の膨張といった諸症状は医術に携わっている人によっては徴証と捉えられるが, 教示されていない人々によっては徴証として捉えられないという議論が Sextus Empiricus, *Ad. math.* VIII, 204 にある。

- 31) 「声に出して言われるもの」は完全な文に限られるという論者 (Sedley 1996, 89-97) もいるが、前後で取り上げられているのが完全な文だけではなく、単独の名詞 (名前) や動詞であることから、そうではないと考えるのが妥当であろう。ポエティウスも「声に出して言われるもの」は名詞、動詞及び名詞と動詞からなる文であると考えている。 *In PH*², 30, 29-30.
- 32) Magee 1989, 55-56.
- 33) 『ケケロの「トピカ」注解』は『命題論注解』より後の著作だと考えられているが、『命題論』を訳す以前に、ポエティウスは、おそらく既に、直接的ないしは間接的に例えばクインティリアヌスの『弁論家の教育』 (*Inst.* I, vi) を通してケケロの先例を知っていたと考えられる。
- 34) 例えば *φαντασία* をケケロは *visum* と訳す (*De fato*, xix 43) が、ポエティウスは *imaginatio* と訳す (*In PH*², 28, 1)。
- 35) 文字: Cicero, *De repub.* III, 2, 3; Boethius, *Consolatio philosophiae* VI, m. iv. コインの刻印: Suetonius, *De vita* II, *Augustus*, 94. ワイン樽の銘柄の印: Horatius, *Odes* II, 3.
- 36) *In PH*², 32, 13-29. コインと言葉の類比を用いた洞察は完全にポエティウスのオリジナルではないだろう。Augustinus, *De doct. christiana* II, xxv, 39; Ammonius, *In PH*, 22, 33-23, 2.
- 37) *In PH*², 59, 6-7. Cf. Ammonius, *In PH*, 23, 7. ポエティウスの“*ad placitum*”を「恣意的」ととる解釈 (例えば Engels 1963, 109) には同意しない。
- 38) アリストテレスの発言 (*PH*, ch. 2, 16a19) に従って、ポエティウスは、後の注解の部分で、名詞・動詞については「規約による (*sec. placitum*)」と明言している。 *In PH*², 66, 6-8.
- 39) *In PH*², 48, 15-21.
- 40) 文脈から 16a4 (ラテン訳) で言われているこの言葉を補うことができる。
- 41) Ax 1992, 254-255 もこのような解釈を提示している。
- 42) *In PH*², 44, 9-51, 3.
- 43) *In PH*², 46, 30-47, 5; *In PH*², 49, 27-32.
- 44) *In PH*², 30, 3-10.
- 45) *In PH*², 23, 1-5.
- 46) この点、ポエティウスの解釈は、名詞・動詞の区別の自然性に関する洞察を欠くアモンニオスのそれと微妙にかつ重大に異なっている (Ammonius, *In PH*, 20, 6-8)。
- 47) *In PH*², 7, 12-18.
- 48) *In PH*², 7, 27-31.
- 49) Cf. Ax 1992, 254.
- 50) *Rhet.* I, ch. 2. ポエティウスがアリストテレスの『弁論術』を直接読んだ可能性は低

い。翻訳を試みた形跡はないし、引用も見られない。しかし、ラテン修辞学の書物—— Cicero, *De inv.* I, xxx, 48 や Quintilianus, *Inst.* V, ix, 9-11 に *signum* の定義が見られる——を介して間接的に影響を受けた可能性はある。

- 51) 本論では詳しく検討する余裕はないが、ストア派の *σημείον* 概念も *signum* が避けられる要因を成した可能性がある。ストア派によれば、*σημείον* は「正当な仮言命題において先導し、後件を顕示する命題」である (Sextus Empiricus, *PH* II, 104; *Ad. math.* VIII, 245)。
- 52) 私自身、ポエティウスの「接続詞」概念にストア派の影響が見られることを拙論「ポエティウスにおける論理と文法」『中世哲学研究』第25号(2006年11月)20-33頁で指摘した。
- 53) Kretzmannのポエティウスの *significare* 概念におけるストア派の影響の指摘、Mageeのポエティウスの「心的語り」概念におけるプロクロスの影響の指摘、De Rijkのポエティウスの動詞 *esse* 理解におけるアンモニオスの影響の指摘などがそうであり、それぞれ、準備中の拙論 (Ph. D dissertation, Saint Louis University) 第二, 三, 五章で批判を行なっている。「心的語り」を巡る Mageeの解釈の批判は、拙論「ポエティウスにおける思考の語り」『アルケー (関西哲学会年報)』第13号(2005年6月)130-140頁で部分的に公表した。

引用文献

- Aubenque, P. 1962. *Le problème de l'être chez Aristote*. Paris: PUF.
- Ax, W. 1992. "Aristoteles (384-322)." In *Sprachphilosophie. Ein internationales Handbuch zeitgenössischer Forschung*. 1 Halbband, ed. M. Dascal, D. Gerhardus, K. Lorenz and G. Meggle. Berlin: De Gruyter, 1992, 244-259.
- Engels, J. 1963. "Origine, sens et survie du terme boécien 'secundum placitum.'" *Vivarium* 1: 87-114.
- Irwin, T. H. 1982. "Aristotle's Concept of Signification." In *Language and Logos*, ed. M. Schofield and M. Nussbaum. Cambridge: Cambridge University Press, 240-266.
- Kelly, J. N. D. 1972. *Early Christian Creeds*. 3rd ed. New York: David McKay.
- Kretzmann, N. 1967. "Semantics, History of." In *The Encyclopedia of Philosophy*, ed. P. Edwards. New York, London: Macmillan, 7: 359-406.
- . 1974. "Aristotle on Spoken Sound Significant by Convention." In *Ancient Logic and its Modern Interpretations*, ed. J. Corcoran. Dordrecht: Reidel, 3-21.
- Magee, J. C. 1989. *Boethius on Signification and Mind*. Leiden: Brill.
- Manetti, G. 1993. *Theories of the Sign in Classical Antiquity*. Bloomington: Indiana University Press. Trs. C. Richardson from *Le Teorie del segno nell'antichità classica*, Milano, 1987.

- Müri, W. 1931. "ΣΥΜΒΟΛΟΝ. Wort-und Sachgeschichtliche Studie." *Beilage zum Jahresbericht über das Städtische Gymnasium in Bern I-III*: 1-46; In *Griechische Studien*. Basel: Friedrich Reinhardt, 1976, 1-44.
- Sedley, D. 1996. "Aristotle's *De Interpretatione* and Ancient Semantics." In *Knowledge through Signs: Ancient Semiotic Theories and Practices*, ed. G. Mannetti. Brussels: Brepols, 87-108.
- Weidemann, H. 1982. "Ansätze zu einer semantischen Theorie bei Aristoteles." *Zeitschrift für Semiotik* 4: 241-257.
- . 2002. *Aristoteles. Peri Hermeneias*. 2nd ed. Berlin: Akademie.
- Whitaker, C. W. A. 1996. *Aristotle's De Interpretatione: Contradiction and Dialectic*. Oxford: Oxford University Press.

本研究は平成十八年度科学技術研究費補助金による研究成果の一部である。ギリシア語文献の訳等について御助言頂いた金山弥平先生に感謝申し上げます。